
越智木高等学校第二文芸同好会

啓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

越智木高等学校第二文芸同好会

【Nコード】

N7131T

【作者名】

啓

【あらすじ】

関東にはあるけれど少し田舎のT県、越智木高等学校。

そこに、文芸部と第二文芸同好会があった。

読まれるためにある文芸部と書くためにある第二文芸同好会。

季節は春、新入生が今年も入ってきた……

一部、週間少年誌程度の性的な表現があります。

自サイトとの並行公開になります（基本的に自サイト優先）。

プロローグ

県立越智木高等学校。

Ｔ県内でも有数の進学校であるここに、とある同好会があった。その名は「第二文芸同好会」、通称「二文」と言われる存在である。

第二という名から想像出来る通りに文芸部が存在しているが、そこに居られないはみだし者達が集まる、奇怪な同好会だ。

現在の在籍生徒数は5名。その内1人は兼部しており、規則により新規の会員を得られなければ存続が危ぶまれる微妙な同好会であった。

時は四月、卒業生が去り残された5人は意気込んで新入会員の確保に 勤しんでなかった。

そもそも物好きの集まりであり、顧問の好意で借りている社会化教室で各々好き勝手にしているだけ。だから急いで集める事をする必要が無かった。

同好会が発足して4年目の春。

文芸部は今年も多くの入部希望者に辟易としていた。

文芸部のOBが若年世代に支持されている作家として名を馳せたのが原因か、ここ数年入部希望者が多い。

だが、部室の席には限度がある。そのため入部者を制限している。今年も殆どの希望者を落とす事に文芸部部长は肩を落とした。

何せ、選考を自分1人に任されたのだから荷が重いとしか言いようが無かった。

罪悪感を感じつつ、一つ一つ丁寧に入部テストとして提出された原稿を読んでいく。

そして次々に不採用の印をつけていく。

1人、目に留まる者があった。単に名前が珍しいだけの事だ。

そして原稿を読んで、また不採用の印をつけた。
それが、始まりになるとは誰も予想していなかった。

プロローグ（後書き）

ご気軽に感想、メッセージ、レビュー等をどうぞ。
叱咤激励はやる気に直結です。

第一話（前書き）

加筆とかするつもりでしたけど、面倒でした。

第一話

桜の舞う四月。入学式で浮き足立った日々が少しだけ落ち着き始めた頃、それは唐突に告げられた。

「残念だけど入部は諦めて」

微かに傾き朱色が混じり始めた日差しに、図書室隣の部屋の前でその人の眼鏡が光った。図書室からの小さな物音と部屋から聞こえる、これもまた小さな物音。グラウンドの運動部がランニングでもしているのか良く通る声で数を合唱していたが、そんなものは耳に届かなかった。目の前に突きつけられた現実に脳が上手く働かない。「ウチも人数が多くなつたせいで誰も彼も入部と言うわけには行かないのよ」

数枚の紙の束を目の前に突きつけて冷たく言い放たれる。そんなと口を開いたが声にならなかった。たった一枚の薄いレンズ越し見た、見下したような眼光に怖気付いたからだ。

「はい、次は」

冷静に、何事も無かつたかのように違う名前が呼ばれる。それはもう話すことが無いと態度で表されていた。反論の余地もない。もし反論したところでここに集まった十数人に睨まれていただろう。そう思うとぞつとして、とぼとぼと自分の教室に向かうため歩き出した。左手に持った紙束をくしゃくしゃにして捨ててしまおうかと思つたが、結局それは出来ずに折り目を付けぬ様にしっかりと持っていた。

特別教室棟から一般教室棟へと続く渡り廊下に差し掛かった所で俯いていた視界に影が差した。

ああ、人が居たのか、避けて通らないと。自然と右に避けると影も右に動く。今度は左に避けるとそれも左に避ける。虐めなのかと少し視線を上げると青のカラーが入った上履きが見えた。

更に少し上げると校章のワンポイントが入った白いソックス。健

康的な膝から太もが見えたところで目の前の人を女子だと分かった。

「ね、君」

声を掛けられてようやく徐々に上げていた視線を顔ごと上げて声の主を直視した。夕日に変わり始めた日差しが、若干紅潮しているようにも見える肌は元々肌の色が濃いのだろうか、健康的な色と艶を持っていた。

短めに切りそろえた髪に少々釣り上がった目は切れ長で、同じ年代とは思えない大人びた雰囲気を出している。少し 漬れたと言えは語弊がありそうだが 丸みを帯びた鼻は愛嬌があるが目とは不釣り合いな感じを受けた。熟した林檎の様に発色している唇は色つきのリップでも使っているのだろうか。それが笑みの形に曲がっていて僕を見ていた。

「僕、ですか？」

情けない声が出た。最初に確認した上履きの色で最上級生と分かっていたから、下手に出るのは当たり前と言えは当たり前だった。

「その、持っている紙って原稿？」

その、と左手に持っていた紙を指差してくる。妙に決まっているのは雰囲気の良いだろうか。はい、と返事と共に頷くと彼女は見せてと言ってきた。

「はあ、良いですけど、もしかして文芸部の方ですか？」

早速目を通し始めた所悪いとは思ったが、疑問を解消することを選ぶ。

「うん？ 私？」

「はい」

彼女は声を出して笑うと首を横に振って答えた。

「私は文芸部じゃないけど文芸部かな」

「……なんですか、それ」

「答えるのは読んでからでもいいかな？」

頷くと彼女は渡り廊下の壁に寄りかかって再び読み始めた。読ん

でいる人を見つめるのも悪い気がして、僕は手持ち無沙汰に窓から夕日を眺めた。

高校を囲む住宅街に夕日が隠れて蛍光灯に明かりが灯るとほぼ同時に「読み終わったよ」と声が掛かって改めて彼女の方に身体を向けた。

「これ、文芸部から落とされたでしょ」

返された原稿を再び指差してくる。

「……はい」

痛みを抉られた様で返事をするのに時間が掛かった。彼女はそんな僕の様子を無視して話を続ける。

「それじゃ、君の質問に答えるね。私は第二文芸部の部長なの」

「第二……文芸部？」

「そう、第二文芸部」

自信満々に彼女は答えたのだ。

第一話（後書き）

ご気軽に感想、メッセージ、レビューをどうぞ。

第二話（前書き）

私の青春でもありません。

この頃は軽くヒキってたなあ。

第二話

葛生耶弥、と第二文芸部の部長は名乗った。特別美人というわけではない、可愛いというわけでもない、強いて言えば田舎に居そうな健康的でちよっとお洒落を試してみたような、そんな人だ。

「簡単な話、文芸部で落とされた人や進んで入った変わり者を収容している所なのね」

完全に夕日が沈んだのだろう。渡り廊下は蛍光灯の明かりしかなかったが、それでも葛生先輩はどこか人を惹き付けるものがあつた。不穏な単語がありはしたが、何故か突っ込むことも出来ずに聞き入っていた。

「文芸部の入部説明会で話は聞いたと思うけど、今の文芸部は部室の収容人数に対して多すぎる人数を抱えているから前々年度から入部制限を掛けているのよ」

ああ、それは五日前に聞いた。確か顧問の現代文教師は在学時代に文壇デビューしたとか、卒業生に数人商業で活躍している人がいるせいで無駄に人気になった。それで人数過多となつて今では入部制限を掛けていて、入部条件は作品を書いてそれを提出し、それで審査される。提出したのは月曜日 二日前のことだ。

「弾かれた大多数はそのまま諦めるんだけど、諦めきれない人が居る」

「それが第二文芸部、ですか」

「ええ。正式には同好会だから第二文芸同好会、になるけどね。顧問なんかお爺ちゃん先生で名前だけ借りただけみたいだし」

「はあ」

なんとも気の抜けた返事しか出来ない。さつき文芸部に弾かれて気落ちしていて、傷跡も抉られているのだから仕方ないのかもしれない。

「もし君にその気があるのなら、来てみない？ 第二文芸部 通

称二文に」

感傷があつたのかもしれない。文芸部に未練があつたのもあるだろう。僕は素直に頷いていた。

「大平下伊織君、でいいのかな」

「え、ああ、どこで僕の名前を？」

「それ」

三度原稿を指差した。見れば表紙に名前を印刷してある。ああ、そついうところは抜け目がないのか。

「それじゃ部室に案内するね」

僕を抜いて歩き始めた葛生先輩の後を追いかける。

「同好会に部室があるんですか？」

尋ねると短い髪を靡かせて、にこりと笑った。一欠けらの不信感も与えない笑みだった。

「ないよ」

「え、じゃあ部室って」

「私たちには与えられてないの。けど、お爺ちゃん先生に授業以外で使わない社会科教室を使わせて貰っているの。お爺ちゃん、地理と現代社会の先生だしね」

なるほど、だから再び特別教室棟へと進んでいるのか。同じ道が蛍光灯のせいで先ほどとは違って見える。追いかける背中が頼もしく見えるせいも、俯き加減だった頭も前を向いて歩いていった。

道中、図書室の前を通りかかるとまだ人が数人残っていた。中には機嫌が悪そうな表情をした人もいて、同類なのかと納得した。僕に落選通達を出した文芸部の部長は相変わらずの冷たい視線で原稿を見ては言葉を短く投げていた。

と、葛生先輩が立ち止まって声を上げた。

「とーこ！ この子貰っていくから！」

声に反応したのか、先ほどまで感情のなさそうな瞳がイラついた表情と共に葛生先輩を睨んだ。

「耶弥……勝手になさい」

「そのつもり！」

冷やかな文芸部部長の声とは裏腹に葛生先輩は元気一杯と言った声で返していた。二人の応酬はそれだけで、再び歩き始めた先輩の後を無言で着いていった。図書室近くの階段を一階まで下りて、特別教室棟の中ほどで先輩は立ち止まってドアの上を指差す。黙ってその先を追うと、プレートに社会科教室と書かれてあった。

「ここが私たちの部室ね。一年じゃ殆ど使わない教室だけど、二年から地理か日本史で分かれた時に使うかもしれないから覚えておいて損はないかな」

言ってドアを開き中に踏み入った先輩の背中に隠れるように僕も中に入ってしまった。

葛生先輩の第一声はこうだ。

「あれ、今日は誰もいないや」

第二話（後書き）

「気軽に感想もメッセージもレビューもどんどんぞう」

第三話（前書き）

この物語は、実は作っていた設定のスピンオフでした。

第三話

適当な場所に座つてと言われ、言われたとおりに近くにあった椅子に腰掛けると葛生先輩はその対面へ椅子をこちらに向けてから座った。

「さて、他の部員が居ないようだけど簡単に説明するね」

先輩の話を要約するところだ。

会員は五名。文芸部入部の落選人数から考えると極めて少数だが、殆どの者が文芸部に入ることが目的だったので第二文芸同好会には見向きもされなかった。毎週月曜金曜の放課後に集まっているが、何となくここに集まっている日もあるという。主な活動は学校祭での作品展示と販売。月例会と言つて、毎月作品を一本以上書いて全員で回し読みして感想を言い合う。投稿は自由。活動費が生徒会から支給されないので毎月数百円を会員から徴収してそれを活動費として使用している。活動費の主な用途は月例会ごとに全員の作品を納めるバインダーの購入費で、残りは学校祭への積立金になる。月例会の作品を納めたバインダーは顧問の先生に許可を貰つて準備室のロッカーに納めてある。

「質問はある？」

なかなかまとまつた説明で、痒い所に手が届いている。お陰で質問することがないと首を振るしかなかった。

「そう。ああ、それと文芸部の入部説明で言つてなかったと思うけど、実力と熱意を認めれば後でも入れてもらえるからね。もし文芸部に入りたいと思うのなら、何度も原稿を持って行くといいよ」
それは初耳だ。確かにそんなことは入部説明会でも、落選通知でも言われていない。

「君はどうする？」

「僕は……」

どうしようか。一瞬でも迷つてしまう。未練が無いとは言えない。

だが、僕はこの葛生先輩の人柄に惹かれつつある。はきはきとした物言いに元気のよさ。快活を絵に描いた様とは正にこの人だ。こうして初対面で向かい合っても嫌な感じもしないし、変に緊張もしない。初めてであるのに何年か過ごしたかのような安心感さえ感じつつある。

言い淀んだのを見てか、葛生先輩は助け舟を出してくれた。

「まあ今すぐ答えを出して、なんて訳じゃないから。私たちも部活に昇格出来ない立場にあるから部員集めに躍起になっているわけでもないしね」

「そう……ですか。それなら少し考えさせてもらっても」

「いいよ」

読んだように言葉を重ねてくる。それを不快に思えない。葛生先輩の人柄がなせる業だろう。

「それじゃこれで説明は終わりだけど、一つ聞いていい？」

「あ、はい」

「貴方がこれを書いて、読んだ人に伝えようとしたメッセージは何？」

四度目の原稿への指差し。だがそれが今までのものとは比べ物に無いくらいの鋭さを持っていた。瞳は真剣に僕のことを見つめ、一言一句をも逃さぬばかりの気負いがあった。

「これ、ですか」

若干震えた言葉をひねり出した僕に葛生先輩は視線を外さないように小さく頷いた。言葉を出そうとする口の中がからからに乾いていた。張り付いたように喉は動かない。言い知れぬ迫力に下手な嘘はつけそうもない。もしかしたらどんな嘘でも見抜かれてしまうかもしれない。

だから、正直に答えようと思った。そうするしかなかった。

「これ、は」

うん、と先輩は小さく先を促す。それにつられて言葉が滑り始める。

「二人の男子と一人の女子が騒ぐだけで、メッセージなんかは」
「本当に、ない？」

二の句が遮られる。些細な言葉も注意深く見られている、そんな気がした。

「い、いえ。その 青臭い話になりますけど 読んだ人が少しでも笑ってくれたら、と」

それは僕がいつも根底にある青臭さの塊。皆が笑っていれば幸せだと信じているわけではないけど、心の奥底では願っている幻想。

わざわざ文字にして伝える必要があるのかと言われたら即答できない、そんな儂さの集合体。認めてしまえば崩れる砂上の楼閣だった。「話は進展しないですし、事件も起こりません」

けれど、自然と言葉がこぼれる。

「娯楽のキャラクター小説だと言われればそれまでですが」
どうしてだろう。ブレーキを掛けたいのに身体が動かない。

「それが悪いとは、思えません。だから、僕は」
「これを書いた。一人でも笑ってくれれば、と」

「……はい、その通りです」

今にも泣きそうな声で声を出す。そんな僕の答えに彼女はどう反応するだろうか。嘲笑するだろうか。蔑視するだろうか。鼻を鳴してそっぽを向くかもしれない。

けれど、先輩はただ静かに笑った。嘲笑ではない。見下しているわけでもない。許容するような、温かい笑みだった。

「そっか、やっぱり君は 大平下君は純粹なんだね」

高校生にもなって頭を撫でられたが、とても嬉しかった。自分が認められたことが初めてで、泣きたくなるくらいだ。僕は声を出さずに、心の中だけで静かに泣いた。

第三話（後書き）

感想等はお気軽に

第四話

ゆっくり考えていいから、と言われていたが心の中は決まっていた。迷いは一切無い。未練もないし、寧ろ拒否してくれたことを幸運に思うほどだ。それなのに僕はパソコンに向かって頭をフル稼働させていた。ヘッドフォンから流れるお気に入りのグループの曲の歌詞を聞き取ることも出来ないくらいに集中していた。

開いたファイルは今日返された原稿の元。男女三人が頭の中を空っぽにして馬鹿騒ぎをしているだけの話がただ書き連ねられている。読んだ人が少しでも笑ってくれたら

自分の青臭さだけが見える薄っぺらな駄文。葛生先輩はこれを見て、僕の話聞いて純粹だと言った。多分、それは違うと思う。

これは純粹なわけではない。ただ、技巧やトリック、ギミックを排除して隠さなかつただけだ。隠そうと思えば隠せるものを逆に剥ぎ取った。深く真意を沈めて厚みを作ったようなものをそうとは言わないが、それはそれなりのものになるのではないだろうか。物事は全て単純化する。

確率はいつもゼロか百パーセント。YesかNoだけで世界は出来ていて、0と1で管理される。でも、結局はその二つになっていたものは片方に収束する。現実世界でifの世界を見ることは叶わない。過去は起こるべくして起きた。未来に起こることは起こるべくして起こる。現在という時間は無く、ただ未来を過去に変えるだけ。目を瞑った瞬間に目の前が本当にそのままであるかを実証することは不可能だし、シュレインガーの猫も同じ。パンドラの箱は最後まで何があるか分からない。大体、現実なんて大概予想の斜め上だ。ifのifは想像しても無駄なこと。過去も未来も不変であるのなら、現在の行動も不変。何事も決まったように動く。

うん、未来は大体決まっている。今から百年後なんて僕は死んでいるだろうから、その先がどうなっていようが僕に知る術もなければ

ば知ってもどうすることも出来ない。数億年のサイクルから見れば僕の生きる数十年なんてものは瞬きと同等。死ぬために生きる、なんて言葉があったが、それは間違いではなく正常。どう生きるのが重要ではなく、どう死ぬのが重要。後悔しない様に生きることは異常で、後悔してでも生きることが正常。

もし僕の書いた青さの単純物質を純粹と言うのなら、世界は純粹に満ちている。利権だけの純粹物質、殺人衝動だけの純粹物質。世界は本当に純粹で一杯だ。収束しきった一つを純粹と呼ぶのなら、歴史は全て純粹になり、全て起こった犯罪は純粹に、戦争も、迫害も、何もかも純粹になる。開けてはならない箱も、開けては意味の無い箱も、その全ては純粹ではなくなり世界から爪弾かれる。

色眼鏡を通して作品を見ると、それは不順物質の集合体。人生にドラマを背負わなかった人間たちが死ぬことも許されない。何も感じさせない言葉に反応する人たち。世界を単純化させることが出来るのなら、この話はただ「楽しかった」と書けばいいだけの話。そうではない、そうではないのだ。確かに確率はゼロか百だし、現実には予想の斜め上を通る。ifのifは意味が無いし、過去は不変。それは否定できない。物語の人々は決められた役割をこなすアクターであるし、台本通りに行かないことはない。

だから不気味だ。この世には意味の無いものは大量にある。出会う人々がどれも重要な役割を担うことはないだろう。だったら思いつきり意味のないものを書く。ドラマなんか一切無い。事件なんか一切無い。山場も濡れ場も一切無い。結末なんてどうでもいい。伝えることは一切無い。登場した意味がないし、活躍もしないような人がいてもいい。それくらいが丁度いい。

そう思っただけで逆らって修正していく。人生を持たせ、役割を持たせ、言葉には必要性を吟味し、薄っぺらな張りぼてのテーマを後ろに隠す。ちよっとしたドラマに伏線を張り、徐々に収束させていく。持てる限りの技巧とギミックを凝らし、緩急を考え、リズムをつける。

そうして出来たのは読んで貰うための話だった。

第五話（前書き）

実は自分の覚書でもあったりします。

第五話

次の日、放課後になると僕は出来上がった原稿を手に文芸部のドアを叩いた。顔を出した眼鏡を掛けた男子に言っつて部長を呼び出してもらう。

「あら、貴方は」

言い終わるよりも先に原稿で冷たい視線を遮る。

「これは？」

受け取りながら聞いてくる彼女にただ「読んでください」とだけ返す。僕を数秒見て、彼女は静かに読み始めた。A4用紙十八枚分の量はすんなりとは読み終えられないだろう。昨日とは違い、まだまだ日の高い外の様子を窓から眺めてその時が来るのを待った。

「読み終わったわ」

その声で窓から離れ、改めて向かい合う。グラウンドから活気のある声が物静かさを色濃くした。

「貴方、名前は？」

「大平下、伊織です」

「そう」

一度眼鏡のズレを正して口を開く。

「大平下君、文芸部に入る？」

「いいえ」

即答に意表を突かれたのか、それとも拒否されたことに驚いたのか、彼女は目を見開いた。

「じゃあ、どうして持ってきたの？」

心底不思議そうな顔をされた。かなり人のいる文芸部、入部制限があるくらいだから、持つて来ると言うことは入部したいと同義だ。だけど、僕はそれを裏切る。

「読んで貰うために書いたからです」

「読んで貰うためって、それは普通よ」

「ええ、普通ですね。想像で人生を持たせて、想像通りのレールを歩ませて、想像通りに読んでもらう。それはとても普通です。先の展望まで見通して、言葉の取捨選択をして、伝えたいことを忍ばせて理解されるように神経をすり減らして描く」

僕の零す一つ一つにどこか不満げな表情が見える。

「書いていて、こんなにつまらないことがあるなんて知りませんでした。これが評価されるなら、僕は文芸部には入りません」

全ていい終わって黙って見つめる。彼女は目を瞑ってため息を吐いた後言った。

「全く……分かったわ。どうせ貴方は二文に行くのでしょうか？」

力強く頷く。

「類は友を呼ぶとはよく言ったものね。その原稿、耶弥に見せてみなさい。きつとつまらないと言わわ」

それだけ言うと部長は部屋に戻った。別れの言葉がないまま、僕も何となく社会科教室へと歩みを進めた。

第五話（後書き）

お気軽に以下略

第六話（前書き）

登場人物の苗字はいつも通り栃木関連ですね。

第六話

毎週月曜金曜に集まるけど、たまに集まる日があると言っていた。今日は木曜だから居るかどうかは分からない。居なければ明日来ればいいという気持ちでそのドアを開いた。

中に居たのは葛生先輩だけだった。少々厚めのバインダーを机に置いて読んでいたのだろう。先輩は僕を見ると柔らかい笑顔で迎えてくれた。

「大平下君いらっしやい。入部 入会でもするの？」

「あ、はい。さっき文芸部を断ってきました」

返事をしながら葛生先輩の対面に座った。それが自然であるかのように葛生先輩は嫌な顔一つせずに受け入れた。

「断った？」

「誘われたんですけどね、きっぱりと断りましたよ」

「誘われたなんて結構な名誉だと思うよ。ここよりもお金はあるし、指導もしてくれるしね」

返事の変わりに持っていた原稿をバインダーの上に置いた。

「これで誘われました」

「読んでも？」

言いながら読み始めた先輩に頷いて僕は代わりにさっきまで先輩が読んでいたバインダーを読み始めた。表を見ると前年度の十二月月例会のものらしい。

中身は雑多だ。数枚で終わるような短編もあれば、数十枚も書かれたもの物まである。その中で僕は唯一知っている葛生先輩が書いた物を選んだ。冒頭の一行は「人は頼りにならない」とだけ書かれていた。

表面上は人付き合いがいいと言われる男。だが、本心ではパーソナルスペースは大きいことを自覚している。体裁を取り繕う日常と部屋の中で陰鬱と塞ぎ込む日々が書き込まれている。誰とも付き合

うことなく生きることは出来ないと理解しているが、割り切れずに一人で悶え苦しむエゴとの葛藤。どうすれば救われるのか、それを考え始め

「読み終わったよ」

物語が終盤に差し掛かったところで先輩は口を開いた

「どうですか？」

「うん、これはつまらないね」

文芸部長の言った通りだった。

「やっぱり分かりますか？」

「昨日読んでいたからね。初見じゃ判断難しいかもだけど、でもこれは文芸部向きかな」

僕の思っていたことをずばりと言ってくれた。見抜かれていた。

「でも、二文に入りたいってことは純粹に書きたかったのかな」

また純粹だ。青臭さの塊を隠さないようなものだ。

「純粹に、ですか？ そういうのは意識したことが無いですけど」

僕の言葉に答えてくれると思いきや、先輩は困惑顔になった。

「意識？ …… ああ、純粹ってそういう意味じゃないかな。ストレ

ートに書く、なんて事じゃないよ」

「それじゃ、どういう意味です？」

「そうだね、説明してもいいけど……丁度バインダーもあるし、読んでみれば分かるんじゃないかな。あ、これは私の書いたやつだね、最後まで読んでみてよ」

頷いて僕は先を読み始める。

自身が救われる方法を考えつつ男は普通の生活に戻る。最低限の愛想笑いを浮かべ、面白くも無いのに笑い、体裁だけを取り繕って再び布団の中で苦しむ。どうして人を避けたいくなるのか。どうして避けられないのか。考えれば考える程どつばに嵌り抜け出せなくなる。そして、結局考えることを止めた。眠れない夜を過ごすのならば、いっそ切り捨てる。何度も思ってきたことを今度こそ行動に移した。つまりは、命を断つたのだ。それで話は終わらない。公園で

首を吊った後、病院に搬送され、霊安室に置かれ、死亡証明書が発行され、家に安置され、葬儀がなされ、火葬をされ、四十九日の法要がされ、一年、三年、七年と法事が進む。淡々と忘れ去られてゆく。いつしか墓参りに来る者もなくなる。いつしか墓は崩れ、忘れ去られる。そうしてようやく、一人になれた。

なんとも後味の悪いと言つか、読後感が暗い。明確なメッセージが読み取れないこれはどうなのだろう。端的に言えば、これは一人の男の末路を描いただけ。それ以上はない気がする。

「先輩」

第七話

ようやく顔を上げて声を掛ければ、頼杖について眠りこける葛生先輩がいた。日が沈むのは廊下側だから、残念ながらこちらに斜陽が差し込むことはない。窓から見える朱が入り混じった色合いと下がり始めた室温で夕暮れだと分かる程度だ。

「先輩、起きて下さい」

知り合って二日目という日の浅さでは触られるのを嫌がられるかもしれない。声だけで試みるが先輩は少し唸った程度で起きる気配が無かった。

どうしたものかと思案始めたところで扉が開かれる音がした。一瞬硬直してそちらに振り返ると少々制服を着崩した男子が立っていた。

「お、新入会員か」

小ざつぱりとした髪は手を加えていないのだろう、女子からは羨ましがられそうなストレートだった。身長は高くないだろう、僕と同じくらいかそれ以下。

躊躇もなく歩み寄ってきたその上履きは青色のラインが入っていた。葛生先輩と同じ学年だ。

「こいつ……また寝てるのか」

呆れた表情はドラマの演技を見ているように似合っていた。ため息交じりの言葉を呟き、おもむろに右手を振り上げる。

振り……上げる？

「起きろコラ」

ばちん、とその右腕で葛生先輩の頭を叩いた。音と勢いは殆ど容赦がなかった気がする。葛生先輩は小さな悲鳴を上げて目を白黒させた。しばらく叩かれた箇所を押さえて呻き、暫くしてようやく叩いた張本人を見た。

「う、タケかぁ」

その声色は僕と話していたときとは違う。親密さや愛情が入っているのが分かる、丸みを帯びていた。

「おう。んで、やーは何寝てるんだ？」

「え、あ、私寝てたんだ」

急に視線を向けられる。それに僕は苦笑いを返すのが精一杯だった。

「あはは、ごめんね。私つてすぐに寝ちゃうから」

「寝すぎで馬鹿になったんだっけ」

「うん、そうなの」

男の先輩の言うことに反論もしないで頷く。丸みを感じた声色だが、どこことなく頭が弱そうな印象が強くなってきた。

「こいつ、相当寝ぼけてそうだな……ああ、俺は二文同好会長世話係の間々田健之。よろしく」

自然に差し出された右手を一瞬だけ見つめ、自分の名前を名乗って握手した。

「大平下伊織君、ね。もう入部届けは書いた？」

いつの間にか幼い子供のように間々田先輩の腕に葛生先輩がぶら下がっていた。慣れているのか、間々田先輩は何の反応もしない。

首を横に振って答えると間々田先輩は嘆息して葛生先輩の横に腰を下ろした。葛生先輩はというと、「膝枕だー」と言っただけのように眠り始めていた。

「やーはこれが通常だから気にしなくていいよ」

「やー？」

「あだ名だよ。と言っても呼ぶのは俺だけしかないけどね」

「はあ、そうなんですか」

ここ最近の気の抜けた声を出すのが多い。よく分からない状況に放り込まれる事が多いせいかもしれない。

「それで何か読んでいたようだけど　これはやーのか」

「はい。純粹の意味が分かると言われて読んでいたんですが」

「純粹？ 全く、やーも分かり辛い言い方するよ。読んでみた感想はどう？」

苦笑なのか失笑なのか分かり辛い表情を作って聞いてくる。

「ええと、ちよつと気味が悪いですね」

一瞬だけ躊躇したのはそのまま伝えていいのか迷ったからだ。ここは褒めておくべきだっただろうか。

「客観的に見て、どう思う？」

「客観的、ですか？」

「それがダメなら穿った見方でもいいし、事細かに分析してもいいけど」

「分析、ですか」

鸚鵡返しに呟いてからもう一度バインダーに収まって広げたままの原稿に目をやる。穿った見方でもいいと言っていた。無理やり見る、と言うことだろうか。

「素直になれない寂しがり屋は、自殺をして本格的に一人になってしまった。彼はそんな状況を周りの環境のせいになかったから内に溜め込み、不の螺旋に陥った。一本でも外に向ける状況があれば彼の人生は一変していただろう。現代におけるコミュニケーション不足を揶揄した、風刺でもある。……というところですか？」

「あはは、随分と強引に出したね」

明確に分かる苦笑の表情。でもどこか満足そうだ。

「これもやーの純粹ってヤツなんだ。未完成のような匂いがあつて、読み終わってもしっくりと来ない。何を言いたいのかが分かり辛い。ま、それも当然だ。何も考えてなかったんだから」

第八話（前書き）

題名を考えるのは苦手です。

第八話

何も考えていない。それでこれを書いた？　それが葛生先輩の言う純粹さなのだろうか。

「やーの言う純粹さつてのはね、簡単。考えるよりもタイプするつてこと。自分が書いていて気持ち良くなるためだけに書くこと。つまりはオナニーと一緒にだ」

そう言われると何故かこの無機質な紙の束が異常に見えてくる。「文芸部が読まれるためにあるのなら、ここの二文は書くためにある、という感じがな」

そこまで言われてようやく分かった。だから僕あの原稿が評価されたのか。だから今日の原稿はつまらないのか。

一人納得始めた僕を見て間々田先輩は優しい笑みを嬉しそうに浮かべていた。葛生先輩なんかより余程人を惹きつける魅力があった。こう言つては失礼だろうが、どこか母性愛が感じられる、安心できる魅力だ。

「人は快樂を求めて動く。気持ち悪いことを率先してしようとは思わないからね。プロでもない、プロに憧れるでもない僕ややーはただ気持ちよくなりたくて二文に入った。君はどうする？　ここで公開オナニーでもするか、それとも文芸部でアダルトビデオのようになるか、勿論一人で続けることも選べるさ。本当のオナニーのようにね」

やたらと卑猥な単語を連発する人だ……だが分かりやすい。それだけに否定する材料がない。素直に口を開くしかなかった。

「やっと分かりました。これを書いてつまらなかったですから」

先ほどまで葛生先輩が読んでいた僕の原稿を差し出す。間々田先輩は受け取らずに机にそれを優しく戻した。

「そう思うのならば僕が読まなくてもそういうことだよ。伝えるためのツールではなく、叩きつけるためのツールとして使うのなら僕

が評価する必要はないよ」

「それも……そうですね」

いちいち間々田先輩は分かりやすい。それが嫌味に感じないのは人柄か喋り方か。一見理不尽な物言いをされても素直に受け取ってしまいそうな、危険な魅力も含んでいた。

「さて、日も暮れたし、入会届けは明日でいいかな？」

「あ、はい。大丈夫です」

明日の放課後、と約束を交わしてその日は終わりとなった。間々田先輩は膝枕で眠った葛生先輩を文字通り叩き起こしていた。起き上がった葛生先輩はやはりどこか腑抜けた様子で猫のように間々田先輩にじゃれ付いてはあしらわれていた。その顔は楽しそうだったのでいつものことなのだろう。お先に、と一足早く社会科教室を出ると目の窓には殆ど日がなく、夜の帳が落ち始めていた。

第九話

金曜日。決戦は　なんて曲があつたが僕は悪魔教崇拜者なのでどうでもいい。夢が叶うよりも蠟人形にされたいと思つのは多分の学校で僕くらいだろう。

未だに空気が硬いクラスメイトたちへの挨拶もそこそこに終業のチャイムと同時にそそくさと社会科教室へ向かう。一年の教室から渡り廊下を伝つて特別教室棟に向かう。自然と文芸部室の脇を通ることになる。未練なぞ毛の先ほどもない。だから素通りする気で居ただが

「あら、大平下君じゃない」

呼び止められた。声の主は文芸部長さんだった。部長さんも終業と共に向かつてきたのか、鞆を持っていた。

「あ、どうも」

話す話題なんてないし、そもそも面識さえ二度あつた程度だ。こは軽く挨拶程度で別れるだろう。そう思っていたが裏切られた。

「今更だけど、やっぱり文芸部に来ない？」

「……えつと、昨日断つたはずですが」

「ええ、そうね。でも昨日と今日は違うわ。人の心は移ろい易いもの、と言われているからね」

眼鏡の奥の冷たさがふつと緩む。それだけで印象ががらりと変わる不思議な人だった。

「それはそうですけど、でも僕の心は変わりませんよ」

いつの間にか文芸部室の前で向き合つて話していた。

「そう」

一瞬だけ表情に影が差した。それは本当に一瞬の事で、次の瞬間には優しい笑みに変わり意表を突かれた。

「惜しいわ、全く」

笑顔には似合わない言葉に困惑してしまう。疑問が口から零れ出

そうになったが慌てて飲み込む。何となくこの笑顔は危険な気がしたのだ。

「ありがとうございます。それじゃこの辺で」
軽く会釈してすぐ近くの階段をいつもより早く下った。背中に視線が突き刺さってそうでも振り返ることが出来なかった。

社会科教室の扉を開けるとそこには既に葛生先輩の姿があった。その横に見知らぬ女子生徒もいた。多分二文の人なのだろう。丁寧に編まれた三つ編みが一本、尻尾のように背中に垂れていた。現役高校生としてどうなのだろうかとも思える。

「こんにちは」

とりあえず挨拶をして入ると葛生先輩は声を出して迎え入れてくれた。横の三つ編みさんはこちらを向いて優しく微笑んで会釈をしてくれた。

「春ちゃん、この人がさつき言ってた新入部員ね」

紹介されたので名前と学年を言って頭を下げた。

「私は都賀春、二年ね」

簡潔な自己紹介と教科書のようなお辞儀。育ちがいいのだろう。少々無愛想な気もするが初対面なんてそんなものだ。僕も多少固くなっているとこころもあるし。

「だけど、春ちゃんのこの三つ編みダサイよねー。ね、大平下君」
「へ？」

急に振られてもなんと答えればいいのやら。女子の髪の毛の話は否定するものでもないという最低限の認識はあるものの、紡ぎ出す言葉が見つからない。慌てて言った言葉がこれだ。

「古き良き日本、って感じでいいと思いますよ」

その答えに都賀先輩は声を上げて笑った。葛生先輩は苦笑を浮かべ、僕の肩に手を置いて囁いた。

「大平下君、それって単に古臭いって言ってるのと一緒にだよ」

「あ」

その通りだ。思わず心の中をぼやかして言ったようなものだ。見

苦しい言い訳も出来ずに凍りついた苦笑を貼り付けるしか出来なかった。都賀先輩を直視できなくて、ちらりと横目でのぞくと嫌な顔はしていなかった。

「ま、確かにダサいからね。仕方ないか」

自身の三つ編みを右手で弄りながら都賀先輩は呟いた。それから本来は三つ編みなんかにしていないと語った。

「蓬田先生がね、『髪長すぎるから校則違反だ』って、勝手にやったの」

「ああ、蓬田先生ならやりかねないね」

「ですよね」

女子二人は笑いあつたがこちらの心臓は早鐘のままだ。気にしなかったというよりも許されたような感覚。やってしまったという罪悪感が心に居座っていた。

第十話

「大平下君は蓬田先生って知ってる？」

都賀先輩の声にはっとして振り返る。

「え、いや、全然……です」

「あれ、確か蓬田先生って一年の担任になったんだけどなあ。別のクラスか。まあ、若い男の先生なんだけどね、その先生がさっき言ったように、校則違反になるから飛び切りダサくしてあげる、とか言って三つ編みにしたの」

「そうなんですか」

「うん、だから気にしないでいいよ」

都賀先輩はまた笑った。

「ああ、そう言えば入会届けまだだったよね。ちょっと待ってて」

葛生先輩はそう告げて隣の社会科準備室に入ってしまった。取り残されて少々居心地の悪い空気が流れる。やはり初対面だからだろうか。思い返すと葛生先輩や間々田先輩の時には感じられなかった。

やはり、さっきの事が尾を引いているのだろう。どうしたら良いのか分からず、机に鞆を乗せて窓の外を眺めていた。

「そう言えばこれ読んじゃった。悪かったかな」

わざわざ僕の隣までやってきて紙の束を渡してくる。昨日ここに忘れた原稿だった。

「あ、大丈夫ですよ」

差し出された原稿の表紙を眺めてから鞆に仕舞った。きっとこれの出番は殆どないだろう。

「感想とか聞かないの？」

疑問を素直にぶつけてくる。それが少しだけ心地良かった。

「ええ、見せるべき人に見せたので」

「そっか」

それだけ言って都賀先輩は自分の席に戻っていった。暫くして入

会届けと思われる紙を持って葛生先輩が戻ってきた。

「お待たせ。学年、学級、名前を書いてくれれば大丈夫だから」

「はい」

筆記用具入れから黒のボールペンを出してさらさらと書き込む。

一年四組、大平下伊織、と。書き終わって確認してから葛生先輩に差し出した。

「……うん、大丈夫。それじゃ今日から晴れて二文の一員だね。改めて第二文芸同好会、会長の葛生耶弥です、よろしくね」

差し出された握手に答えて頭を下げた。

「二年で副会長の都賀春。よろしく」

これもまた握手に答える。昨日の間々田先輩といい、握手が挨拶なのだろうか。疑問が頭を掠めたタイミングでその人が教室に入ってきた。

「お、両手に花か。いいことだ」

不穏当な言葉を言いつつ状況を察したのか、歩み寄ってきて挨拶を交わす。

「三年、間々田健之だ。よろしくな」

握手を求められて、一瞬だけ止まった。差し出されたのが左手だったからだ。慣れない左手で手を握る。浮ついた感触が奇妙だった。「タケだタケだ」

葛生先輩は昨日と同じように一気に腑抜けて間々田先輩に抱きついた。やはり、と勘繰るまでもなく二人はそういう関係なのだろう。慣れた事なのか都賀先輩も何も言わずに少し呆れていた。

と、間々田先輩は葛生先輩を剥がしつつこちらを向いた。

「そうそう、大平下君、聞いたぞ」

「え、何をですか？」

はつきり言っただけ何も覚えがない。やんちゃをしたことも問題を起こしたこともないはずだ。

「文芸部のスカウトを蹴ったんだってな。冬子から聞いたよ」

「スカウトって、そんな大袈裟な」

「大袈裟になるんだな、これが。冬子が二回も勧誘したって話だろ？ 前代未聞じゃないか」

「だから大袈裟ですよ」

「だって、二回もだぞ？ あの冬子が。春もそう思うよな？」

「まあ、読んだ感じではあちらに欲しい人材かもしれないね」

と、そこまで言っつて割り込んだ葛生先輩が空気を断ち切った。

「読んだって、さっきまで読んでたつまらないやつ？」

それだけで空気はきっぱりと変わった。都賀先輩も間々田先輩も納得顔になった。

「ああ、なるほど。そうなのか」

二人同じ内容を呟いた。

第十一話

二人の先輩の言う事を統合すると、こうなる。

葛生先輩は動物的感性でしか読まない。本質なんて読まない。ただ一点、楽しそうに書かれているか否かだけしか読まない。

間々田先輩は簡潔すぎて、都賀先輩は複雑すぎて理解できたのはそれだけだった。

「つまりね、私は楽しく書きたいからここに来たんじゃないのかなって思うの」

結局、葛生先輩の言葉が一番分かりやすかった。その通りだったからだ。

「まあ、それなら蹴ったのも領けるか」

間々田先輩の言葉に都賀先輩も頷いた。なんだかんだで一番は葛生先輩のようだ。例え間々田先輩に引っ付いて腑抜けていようとも、だ。

暫く四人で歓談していたところで間々田先輩は切り出した。

「そう言えば、まだ着ていない二文がいるんだけどね、岩舟慶介って人。春と同じクラスだっけ？」

「あー、今年は離れましたよ」

都賀先輩はやや疲れたような顔を作って首を振った。

「春ちゃんは何か聞いてない？」

「いえ、今日は会ってないのでからさっぱりですよ」

「そっか。まあそいつともう一人含めて二文は合計六人になったのか。ああ、そうそう重要なことを聞いてなかったな。兼部をしたり、今後その予定はある？」

「いえ、ないですけど……もう一人？」

「文芸部長」

「はい？」

「文芸部長、宇都宮冬子。それがもう一人の正体」

「なな、なんで文芸部の部長が二文に？」

「なんでって、部長が兼部しちやいけないって話はないしね。別にこちらと確執があるわけでもないし」

「はあ」

話は分かるが納得はし難い。割と名譽な文芸部の部長職に納まりながら二文にも所属。どうしてか、と考えて葛生先輩の言葉を思い出して納得した。つまりはそういうことなのだろう。

僕がここで愚考しても仕方がないし、だからと言っていきなり聞いてみるのもおかしな話だ。いつか機会があったら、と脳の片隅にでも置いておこう。

結論をつけたところで間々田先輩はようやく葛生先輩を剥がそうとしていた。

「やー」

「何？」

「離れてよ」

「やーだー」

猫なで声を発する葛生先輩にはやはり慣れない。若干の頭痛を覚えてちらりと都賀先輩を見ると彼女は眉間を押さえていた。僕と一緒になのだろう。本当にあれで高校三年なのだろうか。

「やーが同好会長なんだからしっかりしてよ」

間々田先輩の正論もどこ吹く風、涼しい顔をしてぐりぐりと顔を間々田先輩の腕にこすり付けていた。きつと前世は猫なのだろう。

「これじゃ使い物にならないな……それじゃ僕から」

およそ受験学年とは思えない、だらしない声を出している葛生先輩を無視して話が進められる。

「えっと、とりあえず今月の月例会なんだけど、今年は趣向を変えようかと思うんだ」

相手にされなくなっただのか、葛生先輩はおとなしくなっていた。多分寝ているのだろう。

「変えるんですか？ そうしたら二文の存在意義が変わりませんか？」

都賀先輩はすぐに反応して言葉を返した。

第十二話

都賀先輩の言葉にさらりと言葉が返ってくる。

「そこはちゃんと考えているよ。根本は変えたくないってやーも言ってたし」

「だったらいいですけど」

「簡単に言えばかなり大雑把なテーマを決めて、そこから自由にやってもらう感じになるかな。自由でいることにほんの些細な制約をつけてもらうだけ」

「大雑把の度合いによりますよ」

「だろうね。僕からしても無闇にそういう拘束はしたくないから、まあ試験的に一回やってみようか、って感じでさ。大平下君はどう？」

「ここでいきなり話を振られた。新人に聞くのはどうかと思うけど答えざるを得ない。」

「僕は……そうですね。本当に大雑把であれば何も困ることはないと思いますよ」

「そっか、それじゃ大平下君も春と同意見だね」

間々田先輩は考え込むような仕草を見せる。妙に決まっっていて、性格を現しているようだった。しかしそれも一瞬。すぐにぼつりと声が漏れてきた。

「はあ、僕も同意見で結局やーの言うテーマ次第か」

と言うことは、間々田先輩も乗り気ではなかったということらしい。言い出したのは葛生先輩だったのだ。あの安心しきり腑抜けた顔で寝ている葛生先輩がそんなことを……と寝顔をじっと見つめるのも憚れるのですぐに視線を間々田先輩に戻す。

「慶介は多分賛成派だろうな。それで反対派は冬子かな。やっぱりやーのテーマ次第か」

あれ、部長さん　　宇都宮先輩は反対派なのか。文芸部の部長と

いう職業柄賛成かと思っていたのだけだ。

「けど、なんでいきなり会長はそんなことを」

都賀さんの漏らした一言が切欠なのか、葛生先輩ががばっと起き上がった。

「うん、春ちゃん達の意見は最もかな。今まで自由自由でやってきたけど、それって考えることを破棄してるのと一緒になの。考えなしに適当にだらだらと書いて提出して『はい、おしまい』だなんてそれは自由じゃないよ。私は考えて自由にやって欲しいの。もっと想像を膨らませて欲しい。そうでないと死ぬんだよ。ちっとも面白くない。自由を感じるためには制約は絶対的に必要なものだからね。

だから敢えて私はそうするんだ。考えなしの作業よりもよっぽど楽しいし、愛着も出る、それに書いた人の想像力の深さも分かる。タケのよく言う、まあ如何わしい言い方だけど、公開オナニーの場で後始末のカスを見せられても異分子になるだけだからね。精神被虐嗜好の同類項なんだから、しっかりとやることはやってもらいたい。それとも、何がオカズなのか知られたくないのかな？」

捲くし立てる言葉。とてもさつきまで猫のように寝ていた人の言葉とは思えない。女性の言うことも思えないが、それはどうでもいいこととしよう。

「今までティッシュの見せ合いをしていたわけだけど、多分各々書いているうちに何かしたと思うことがあつて書いていたと思うよ。今度はそれをひけらかすだけ、それだけだよ。それとも、ここまで言われてもやっぱり濡らした下着は履き替えて拭いたティッシュだけを見せに来る？」

多分全員絶句していたと思う。言いたいことは分からなくもない。ただ例えが下品すぎる。そのせいで分かりにくくしている。どこかに良い例えがないものか。

「つまり、会長は『一滴の水』よりも『砂漠に一滴の水』の方が面白いと」

ああ、それでいい。さすが都賀先輩。古めかしい三つ編みが輝い

て見える。

「そう取って貰って構わないよ」

「はあ……そこまで言われてさよならなんて出来ませんよ。ちなみに私は明確な反対派じゃないのでその言葉は冬子さんをお願いします」

「あつれー、さっき起きたから春ちゃんが反対だと思ってた」

今まで感じたどの空気よりも微妙な雰囲気を感じた。

第十三話

結局、試験的にやってみようということとその場は収まった。葛生先輩から言い渡されたテーマは「嘘」^{エイプリルフール}。四月馬鹿にちなんでいうことだが、本当に大雑把過ぎる。しかもこう言ったのだ。

「テーマは『嘘』だけど、これを主題にしるってことじゃないよ。嘘というキーワードから想像して膨らませて、適当に書きちゃってどの道私たちが書くものはノンフィクション以外は嘘の塊なんだから」

ということだ。つまりはなんでもありと、会長自ら言いのけたのだ。とぼとぼと文芸部室へ続く階段を上りながらため息をつく。

どうして僕が文芸部長へ言伝をしなければならぬのだ、と。

決まったことを伝えるのなら葛生先輩が間々田先輩がメールでもすればいいだけの話なのに。全く分からない。

考え事するには距離が短すぎた。結局なにも分からないまま部屋の前に着いていた。小さく二回ノックするとすぐに扉が開いた。

昨日と同じ眼鏡の男子に部長を呼んでもらう。連日のせいか訝るような表情を見せたがすぐに引込んで部長が出てきた。

「あら、大平下君。文芸部に入る気になったの？」

眼鏡の奥はどことなく柔らかい。きつと分かってて言っているのだ。だから僕は微笑みながら答える。入りませんよ、と。手短かに二文での件を伝えると、部長は聊か辟易したような表情を作った。

「はあ……言わんとすることは分からなくはないんだけどね。自由そのものが制約に感じてきたのかな」

ああ、なるほど。そういうことだったのか。ようやく一つ合点がいった。さすが文芸部長、眼鏡は伊達じゃないようだ。

「ま、話は分かったわ」

「そうですね、それじゃこの辺で」

「あ、ちよっと待って」

踵を返そうとしたところで呼び止められる。このパターンが多い気がしてきた。

「時間ある？」

言われて頭の予定帳を開く。中身は未定で一杯だった。時間はいくらでも、と答えると嬉しそうな顔を浮かべて文芸部の扉を開いた。「ま、見学でもして行って」

がらりと大きく開かれた部室は先までいた社会科教室とは真逆であった。並べられた長机に各々が座り、パソコンを前にしてタイプをし続ける人、なにやら討論らしき事をしている人、只管原稿を読んでいる人……部活動と言う名に相違ない光景だった。

「こつちに」

有無も言えず、誘われるがままに背中を追っていく。幾つか視線が突き刺さっているがその主を追うのは怖くて出来ない。猛獣の檻に放り込まれた生肉みたいな状況。正直胃が締め付けられる思いだ。連れられたのは机が二つ、向かい合うように設置された場所だった。対面で話し合うスペースなのだろう。勧められた椅子に腰を落ち着け、肩を竦めて小さくなった僕の前に部長さんはふわりと優雅に座る。この学校は誰も決まるような仕草を持っているのだろうか。

「さて、大平下君」

机に両肘を置いて手を緩く組む。人差し指が浮いているのは癖なのだろうか。そしてその奥にある瞳は先ほどの穏やかさがなくなっていた。

第十四話

僕が入ってきてから部室の賑やかさは鳴りを潜めていた。一挙手一投足が舐めるように見られている感覚に身が縮こまる。

「もう一度聞くけど、文芸部に入る気はない？」

冷静冷徹な声がしんとした部室に響く。なんというプレッシャーだろうか。秒針が削る身体を押しつぶされる。

意地悪な人だ。

「何度でも断りますよ」

冷静に、冷静に。声が震えないように搾り出す。高鳴る心臓が全身に血液を巡らせていることが分かるくらいに緊張している。本当に意地悪な人だ。

「そう、ありがとう」

微笑んだ部長の顔を見て、やはり正解だと安堵できた。微かにざわつき始めた外野を気にせず、部長は続ける。

「大平下君が私の友達を裏切らなくて良かったわ」

「それはよかったです」

「それでそんな貴方に頼みがあるのだけれど」

「はい？ 僕に、ですか？」

僕に頼めることなんてそれこそ幾許もない。二文のことなら間々田先輩か葛生先輩に頼めばいいことだ。新入りの僕に頼むメリットは一つもない。文芸部に関わることだとしても、ここは人数が豊富だ。男子部員も結構居るし、力仕事を頼むことでもないだろう。だとしたら、何なのだろう。

「文芸部はね、季刊で部誌を発行しているのよ。近隣の本屋さんに置いて貰ったり、前線で働いているOBの方へ送ったり、あとは購買でも販売しているわ」

「そうなんですか」

運ぶのを手伝えということだろうか。それとも印刷とか製本をす

ればいいのだろうか。だが、部長さんの言葉は予想の斜め上だった。

「貴方、寄稿してくれないかしら」

「寄稿、ですか？ 奇行ではなくて？」

「ええ、寄稿よ。部誌に一つお願いしたいのだけれど」

部長さんは至って大真面目らしい。浮いていた人差し指を遊ぶように動かしながら発せられる言葉は信じられないものばかりだ。

「あのですね、僕は部外者ですよ」

「だから寄稿して貰うのよ。部外者の原稿が入るにはこれしかないじゃない」

「でしたら、二文と合同誌にしたらどうですか？」

「それはダメなのよ。貴方には途方もなく『つまらなく』書いて欲しいから」

つまらなく、に妙にアクセントがついた。

「……どうして、僕なんですか？ 僕なんかよりも文芸部の部員の人の方が」

「貴方程度は世の中にごまんといえるわ。けれど、ここに貴方程度は残念ながないのよ」

「……どっちの意味でしょうか」

「さあ、どちらでしょうね」

からかうように小さい声で笑う。こういう事を小悪魔的、と言うのだろうか正直その形容は部長さんには似合わない。からかうような状況なのに、鈴を転がすような声に優しすぎる微笑は天使と呼ぶに相応しかったからだ。

一瞬だけ見惚れてしまったが、それだけでは吞まれてしまう。僕は話を続けることを選んだ。

「どちらにしても、僕に書かせて何がしたいんですか？」

聞くと部長さんは考え込んでしまった。まさか何も考えていないのだろうか。考えなしにこんな事をさせてどんな利点がある？ 僕を文芸部に取り込むため？ いや、それは冒頭で自ら棄却している。それは裏切りになってしまうからだ。

いや、どうだろうか。二文に入った僕につまりまもなく書かせるとい
うのは、裏切りの範疇に入るかもしれない。だとしたら、この人は
矛盾している。

漸く考え終わった部長さんからの言葉は、やはり予想外であった。

第十五話

浮かし続けていた人差し指をついにぐっと組んだ部長さんの瞳は真剣のそのままだった。

「二文で書き続けて、評価されることはないと思うの」
こう、切り出した。

「好き勝手書いて、まとめて、読んで、はいお終い。それじゃ進歩なんてないのよ。酷評されてでも読んで貰って、それを糧に成長しなければならぬ。文芸部の基本方針はそれなのよ。もちろん、貴方が二文であることは重々承知だし、私だってそう。でもね、ツールがあっても使い方を知らなければ自由にはなれない。例えば……そう、ものさしを持ってても逆の手で押さえることを知らなければ直線は引けないわ」

部長さんが淡々と述べるその言葉は分かる。日本語だって、知らなければ語彙は貧弱なままで自由に書けない。それは分かる。表現の方法が分からなければ、物語の作り方、書き方、プロットやキャラ作り 様々なツールの使い方を学べばそれだけ自由に書く幅が広がる。だが、それだけに疑問は大きくなる。

もしこれが身軽な僕自身だけであつたなら断りはしないだろう。問題は、そう。僕が二文にいて、僕だけに言われていることが問題なのだ。だから、もう一度同じ言葉で問う。

「どうして、僕なんですか？」

なんとも言葉足らずな発言だろう。前後関係がわかって事情がわかって、さらに内面で考えたことまで分からなければ意味のない問いだ。

だが、驚くことに部長さんは凜として答える。

「耶弥や健之、それに春や岩舟も一度はやったのよ。簡単でしょう？」

それで僕に白羽の矢が立ったのか。実に簡潔、単純明快だ。それ

を理解するのに時間が掛かったのは、部長さんが僕の言葉の意味を全て汲み取ったことに驚いていたからだ。

「それで、僕なんですか？　いえ、どうして二文に声を掛けているんですか？」

僕の疑問は尽きない。一つ聞けば一つ返ってきて、一つ納得して一つ疑問が湧き出る。

「単純な好奇心よ。好き勝手書いている人がきっちり書いた時、どんな評価がされるかってね」

今度こそ悪戯な笑みを見た。どことなく試されているような台詞。そして、二文の誰しもがやったという事実。

つまり、これを断れば二文の通過儀礼的なものを蹴ってしまうこととに他ならない。二文にいるためには必要なこと、そう言われている様だった。

ここまで言われて断ることは出来ない。

「わかりました、やります。……いえ、やらせて頂きます」

僕の言葉で安心したのか、冬子さんはただ深く頷いた。

第十六話

大平下伊織の返事の後、ページ数、規定書式、サイズ、締め切り、そしてテーマを伝えた。その他細々としたことは後で伝えるので、と携帯のアドレスを交換して帰ってしまった。

「部長、本当にあの人がいいんですか？」

何度か伊織を出迎えた眼鏡の男子生徒がまだ座ったままの冬子に問う。

「渡良瀬君、良い質問ね」

ずれてもいない眼鏡を正して、その眼光を強める。

「大平下君はね、きつと何も変わらない。評価もされないでしょう。評価と言う点では葛生耶弥の方がいいわ」

「……では、どうして？」

「私と同じで、でも逆を選んだから、というのもあるわね」

二年前を思い出す。同じ頃、冬子自身が悩んだことを。

「でも、それ以上に喧嘩を売られたからよ。あそこまで挑発されたら意地でも買いたくなっただわ」

未だに覚えている。二年前と同じ言葉で否定されたのだ、忘れられるはずもない。葛生耶弥につまらないと言われたこと。大平下伊織につまらないと拒否されたこと。

耶弥ならまだ言っただけで可愛いものだ。だが、大平下伊織は違う。わざわざつまらないと書いた原稿を読ませて、その上で言いかけた。これは挑発に他ならない。

そして、喧嘩とも取れた。

「喧嘩、ですか。部長には似合わないですね」

「そう？ これでも陰湿に好戦家よ。ただ、売ってくれる相手がないだけ。そして勝てる喧嘩しか買わないだけ」

唇の端を微かに歪める冬子だが、幸運かその表情は渡良瀬には見えなかった。

「確かに、陰湿ですね」

それきり渡良瀬は元の場所へ作業に戻っていった。捻くれた自分に自嘲気味の笑みを作る。本当、陰湿だ。

大平下伊織は与えられた条件でどこまでやるか、それは楽しみである。あの程度で、あれ程で、どこまでやってくれるのか。

「本当、楽しみね」

締め切りにどんな原稿が出てくるのか。どう修正するか。どんな話が聞けて、どんな議論になるのか。プロット段階から見たい気もするが、それはそれ、編集者ではないのだからその辺りは部員も含めて自由にやってみよう。

まあ、不安があったら聞いてくるでしょう。

その時の為の台詞を用意しながら冬子は座り続けていた椅子から立ち上がり、部長のスペースに戻った。

ああ、そう言えば月例会用の原稿もあるのだった。思い出し、部長の席で始めたのは二文用のネタ出しだった。

第十七話

部誌への寄稿をすることになったが、あまり時間がないようだった。二週間あればいい方、と言っていたがその通りだ。もう四月は二週目の金曜日、来週は三週目だ。五月の頭に入稿と言っていたので締め切りはそれよりも前、ぶっちゃけ来週の金曜だった。

そして追い込むように月例会も重なる。いや、分かっていたことだ。

さて、ネタはどうするか。月例会は「嘘」、文芸部は「出会いと別れ」。少しも重ならないテーマだけに、強引に重なるよりは素直に二つ出したほうがいいだろう。

ヘッドフォンの音量を気持ち上げ、紙に向かう。中心に「出会いと別れ」と書いて丸で囲む。ここから連想ゲームの世界だ。ここから何を連想するか。ぱっと思いついた言葉を書いてゆく。

真っ先に思い浮かんだ「恋愛」という言葉を書いて矢印で引っ張る。自己流のマインドマップで見づらい事この上ないが気にしない。解説書も何も読んだことが無い僕が自然と身につけた物だから、これでいいのだ。

自己流でのルールは単純。思いついたのを書いて行く。訂正、修正しない。もし間違えたときは新たに書き足してゆく。やがて、線と文字で埋まり、何が書いてあるのか分からなくなったら一旦停止。その中で読める場所、白い場所は思いつかなかった場所だからそこから発展しないので切り捨てる。新しい紙を出して、読める、覚えている物を書き出して行く。それを数度繰り返す。

三枚もやると大分読みやすくなってくる。そうなると新しい手順に入る。普段から書いていたぶつ切りのエピソード集を印刷して行く。それを見ながら、どの言葉にどのエピソードが入るのか考える。一旦組み立てる。すぐに崩す。また組み立てる、また崩す。また組み立てる、また崩す。その繰り返し。そのうち使われない、使われ

にくい部品が出てくるのでそれを切り捨てる。

そうして残った物を置いておいて、漸くプロットらしいものを考える。必要なのは始まりと終わり、掴みとオチ。あらすじはたったの二行。それを起点として再びマインドマップを作る。ぶつ切りのエピソードで組み立てしてみても、何とか形になりそうになったらひとまずそこで止める。

再び新しい紙に必要な役割を書き出してゆく。新しいエピソードが浮かんだら別紙に書いて行く。ある程度書き出したら、今度は切り詰めてゆく作業。使いそうも無い、あるいは掛け持ちで済まされる役割を消してゆく。絞りきれたら、次は人生を作つてゆく。絶対に書かないような過去も全て書いて行く。こういう設定を書いておくと、後々困らないのだ。

人物、プロットが完成したら、頭に放り込んで動かしてみる。ここでは收拾が付かないことが多々あるが、それは気にしない。プロット通りに動かない人々を楽しみつつ、沸いてきたオリジナルのエピソードを書き出してゆく。こういうのは大体使われないが、ストックになるので良しとする。

ここまでやって、一日置いておく。無論、頭の中で遊ばせたままだ。コンポの電源を落とし、ベッドに潜り込む。

明日は土曜日、半ドンで授業がある。恐らく授業中は聞けないだろうがいいだろう。頭の中で遊ぶ人物たちを尻目に眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7131t/>

越智木高等学校第二文芸同好会

2011年8月15日03時24分発行